夏目漱石著

# 鶉籠

夏日漫興

熊克

番陽堂

特選 名著複刻全集 近代文学館

昭和[illegible]年5月1日 印刷
昭和[illegible]年5月10日 発行

夏目漱石著

鶉籠

春陽堂版

刊　行　財団法人 日本近代文学館
東京都目黒区駒場4－3－55
代表者 塩田良平

編　集　特選名著複刻全集近代文学館・編集委員会
代表者 稲垣達郎

総発売元　株式会社 図書月販
東京都新宿区市ヶ谷本村町35 千代田ビル
代表者 中森蒔人

製　作　株式会社 ほるぷ出版
東京都千代田区麹町3－2 相互第1ビル
代表者 荒井正大

東京連合印刷株式会社
東京都千代田区麹町3－2 相互第1ビル
代表者 長尾義輝

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

# 序

集中收むる所三篇、取材一ならず、趣旨固より同じからず。著者はたゞ此三篇によつて、其胸中に漂へる或物に一種の體を與へたるを信ず。

天下、著者にちかき或物を抱いて、之を捕へ難きに苦しむものあらん。之を捕へて明かならざるを憂ふるものあらん。之を明かにして表現の術なきに困するものあらん。もし「鶉籠」が是等の士に幾分の慰藉を與ふるを得ば著者の願は足る。

著者の描けるものが、如何に讀者の心に映じて、如何に讀者の情を動かすかは、著者の問ふ所にあらず。否問はんと欲するも著者の權外に落つ。「鶉籠」を公けにしたる著者は、たゞ之を公けにしたる迄にて、毫も讀者の情緒と感興とに干渉して、内部の生命を支配するの意あらず。

只文章は趣味を生命とす。文章にして趣味なきは天日の冷やかなるが如し。卒然として存在の價値を失す。「鶉籠」の如何に天下に解釋せらるゝかは著者の憂ふる所にあらず。獨り一個半個の青年あつて、「鶉籠」の爲めに其趣味をあやまられて流俗に墮落したりと云はゞ、「鶉籠」を公けにしたる著者は終生の恥辱なり。

著者が「鶉籠」を公けにしたるは此危險を冒して、苟も名を一代に馳せんとする客氣に驅られたるが爲めにあらず。「鶉籠」は天下青年の趣味をして一厘だに墮落せしむるの虞なき作品たるを信じたればなり。

明治三十九年十一月　　夏目漱石

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 坊っちやん

夏目漱石

親譲りの無鐵砲で子供の時から損ばかりして居る。小學校に居る時分學校の二階から飛び降りて一週間程腰を拔かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出來ない。弱蟲やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて歸つて來た時、おやぢが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を拔かす奴があるかと云つたから、此次は拔かさずに飛んで見せますと答へた。

親類のものから西洋製のナイフを貰つて奇麗な刄を日に翳して、友達に見せて居たら、一人が光る事は光るが切れさうもないと云つた。切れぬ事があるか、何でも切つて見せると受け合つた。そんなら君の指を切つて見ろと注文したから、何だ指位此通だと右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かつたので、今だに親指は手に付いて居る。

然し創痕は死ぬ迄消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き盡すと、南上がりに聊か許りの菜園があつて、眞中に栗の木が一本立つて居る。是は命より大事な栗だ。實の熟する時分は起き拔けに背戸を出て落ちた奴を拾つてきて、學校で食ふ。菜園の西側が山城屋と云ふ質屋の庭續きで、此質屋に勘太郎といふ十三四の悴が居た。勘太郎は無論弱蟲である。弱蟲の癖に四つ目垣を乘りこえて、栗を盜みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隱れて、とう〳〵勘太郎を捕まへてやつた。其時勘太郎は逃げ路を失つて、一生懸命に飛びかゝつて來た。向ふは二つ許り年上である。弱蟲だが力は強い。鉢の開いた頭を、こつちの胸へ宛てゝぐい〳〵押した拍子に、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷の袖の中に這入つた。邪魔になつて手が使へぬから、無暗に手を振つたら、袖の中にある勘太郎の頭が、左右へぐらぐら靡いた。仕舞に苦しがつて袖の中から、おれの二の腕へ食ひ付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけて置いて、足搦をかけて向へ斃してやつた。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩

して、自分の領分へ眞逆樣に落ちて、ぐうと云つた。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になつた。其晩母が山城屋に詫びに行つた序でに袷の片袖も取り返して來た。

此外いたづらは大分やつた。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人參畠をあらした事がある。人參の芽が出揃はぬ處へ藁が一面に敷いてあつたから、其上で三人が半日相撲をとりつゝけに取つたら、人參がみんな蹈みつぶされて仕舞つた。古川の持つて居る田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もある。太い孟宗の節を拔いて、深く埋めた中から水が湧き出てらこい、その稻に水がかゝる仕掛であつた。其時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ちぎれをぎう〳〵井戸の中へ押し込んで、水が出なくなつたのを見屆けて、うちへ歸つて飯を食つて居たら、古川が眞赤になつて怒鳴り込んで來た。慥か罰金を出して濟んだ樣である。

おやぢは些ともおれを可愛がつて呉れなかつた。母は兄許り贔負にして居た。此兄は、やに色が白くつて、芝居の眞似をして女形になるのが好きだつ

た。おれを見る度に、こいつはどうせ碌なものにはならない、とおやぢが云つた。亂暴で亂暴で行く先が案じられると母が云つた。成程碌なものにはならない。御覽の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。只懲役に行かないで生きて居る許りである。

母が病氣で死ぬ二三日前臺所で宙返りをして、へッついの角で肋骨を撲つて大に痛かつた。母が大層怒つて、御前の樣なものゝ顏は見たくないと云ふから、親類へ泊りに行つて居た。するととう〳〵死んだと云ふ報知が來た。さう早く死ぬとは思はなかつた。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかつたと思つて歸つて來た。さうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれの爲めに、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜しかつたから、兄の橫面を張つて大變叱られた。

母が死んでからは、おやぢと兄と三人で暮して居た。おやぢは何にもせぬ男で、人の顏さへ見れば貴樣は駄目だ〳〵と口癖の樣に云つて居た。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやぢが有つたもんだ。兄は實業家になる

とか云つて頻りに英語を勉強して居た。元來女の樣な性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一遍位の割りで喧嘩をして居た。ある時將棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しさうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を眉間へ擲きつけてやつた。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやぢに言付けた。おやぢがおれを勘當すると言ひ出した。

其時はもう仕方がないと觀念して先方の云ふ通り勘當される積りで居たら、十年來召し使つて居るお清と云ふ下女が、泣きながらおやぢに詫まつて、漸くおやぢの怒りが解けた。それにも關らずあまりおやぢを怖いとは思はなかつた。却つて此清と云ふ下女に氣の毒であつた。此下女はもと由緒のあるものだつたさうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公迄する樣になつたのだと聞いて居る。だから婆さんである。此婆さんがどう云ふ因緣か、おれを非常に可愛がつて呉れた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした—おやぢも年中持て餘してゐる—町内では亂暴者の惡太郎と爪彈きをする—此おれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性で

ないとあきらめて居たから、他人から木の端の樣に取り扱はれるのは何とも思はない、却つて此清の樣にちやほやしてくれるのを不審に考へた。清は時時臺所で人の居ない時に「あなたは眞つ直でよい御氣性だ」と賞める事が時々あつた。然しおれには清の云ふ意味が分からなかつた。好い氣性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだらうと思つた。清がこんな事を云ふ度におれは御世辭は嫌だと答へるのが常であつた。すると婆さんは夫だから好い御氣性ですと云つては、嬉しさうにおれの顏を眺めて居る。自分の力でおれを製造して誇つてる樣に見える。少々氣味がわるかつた。

母が死んでから清は愈おれを可愛がつた。時々は子供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。つまらない、廢せばいゝのにと思つた。氣の毒だと思つた。夫でも清は可愛がる。折々は自分の小遣で金鍔や紅梅燒を買つてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麥粉を仕入れて置いて、いつの間にか寐て居る枕元へ蕎麥湯を持つて來てくれる。時には鍋燒饂飩さへ買つてくれた。只食ひ物許りではない。靴足袋も貰つた。鉛筆も貰つた。帳面も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

貰つた。是はずつと後の事であるが金を三圓許り貸してくれた事さへある。何も貸せと云つた譯ではない。向で部屋へ持つて來て御小遣がなくて御困りでせう、御使ひなさいと云つて呉れたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使へと云ふから、借りて置いた。實は大變嬉しかつた。其三圓を蝦蟇口へ入れて、懷へ入れたなり便所へ行つたら、すぽりと後架の中へ落して仕舞つた。仕方がないから、のそ〳〵出て來て實は是々だと清に話した所が、清は早速竹の棒を捜して來て、取つて上げますと云つた。しばらくすると井戸端でざあ〳〵音がするから、出て見たら竹の先へ蝦蟇口の紐を引つ懸けたのを水で洗つて居た。夫から口をあけて壹圓札を改めたら茶色になつて模樣が消えかゝつて居た。清は火鉢で乾かして、是でいゝでせうと出した。一寸かいで見て臭いやと云つたら、それぢや御出しなさい、取り換へて來て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三圓持つて來た。此三圓は何に使つたか忘れて仕舞つた。今に返すよと云つたきり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくつても返せない。

清が物を呉れる時には必ずおやぢも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌だと云つて人に隠れて自分丈得をする程嫌な事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を貰ひたくはない。なぜ、おれ一人に呉れて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄したもので御兄様は御父様が買つて御上げなさるから構ひませんと云ふ。是は不公平である。おやぢは頑固だけれども、そんな依怙贔負はせぬ男だ。然し清の眼から見るとさう見えるのだらう。全く愛に溺れて居たに違ない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。單に是許ではない。贔負目は恐ろしいものだ。清はおれを以て將來立身出世して立派なものになると思ひ込んで居た。其癖勉強をする兄は色許り白くつて、迚も役には立たないと一人できめて仕舞つた。こんな婆さんに逢つては叶はない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌なひとは屹度落ち振れるものと信じて居る。おれは其時から別段何になると云ふ了見もなかつた。然し清がなる〳〵と云ふ者だから、矢つ張り何にか成れるんだらうと思つて

居た。今から考へると馬鹿々々しい。ある時抔は清にどんなものになるだらうと聞いて見た事がある。所が清にも別段の考もなかつた樣だ。只手車へ乘つて、立派な玄關のある家をこしらへるに相違ないと云つた。

夫から清はおれがうちでも持つて獨立したら、一所になる氣で居た。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して賴んだ。おれも何だかうちが持てる樣な氣がして、うん置いてやると返事丈はして置いた。所が此女は中々想像の强い女で、あなたはどこが御好き、麹町ですか麻布ですか、御庭へぶらんこを御こしらへ遊ばせ、西洋間は一つで澤山ですと抔と勝手な計畫を獨りで並べて居た。其時は家なんか欲しくも何ともなかつた、西洋館も日本建も全く不用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答へた。すると、あなたは慾がすくなくつて、心が奇麗だと云つて又賞めた。清は何と云つても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間此狀態で暮して居た。おやぢには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰ふ、時々賞められる。別に望もない、是で

澤山だと思つて居た。ほかの子供も一概にこんなものだらうと思つて居た。清が何かにつけて、あなたは御可哀想だ不仕合だと無暗に云ふものだから、それぢや可哀想で不仕合せなんだらうと思つた。其外に苦になる事は少しもなかつた。只おやぢが小遣を呉れないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやぢも卒中で亡くなつた。其年の四月におれはある私立の中學校を卒業する。六月に兄は商業學校を卒業した。兄は何とか會社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ學問をしなければならない。兄は家を賣つて財産を片付けて任地へ出立すると云ひ出した。おれはどうでもするが宜からうと返事をした。どうせ兄の厄介になる氣はない。世話をしてくれるにした所で、喧嘩をするから、向でも何とか云ひ出すに極つて居る。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならない。牛乳配達をしても食つてられると覺悟をした。兄は夫から道具屋を呼んで來て、先祖代々の瓦落多を二束三文に賣つた。家屋敷はある人の周旋である金滿家に讓つた。此は大分金になつ

た樣だが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつく迄神田の小川町へ下宿して居た。清は何十年居たうちが人手に渡るのを大に殘念がつたが、自分のものでないから、仕樣がなかつた。あなたがもう少し年をとつて入らつしやれば、こゝが御相續が出來ますものをとしきりに口說いて居た。もう少し年を取つて相續が出來るものなら、今でも相續が出來る筈だ。婆さんは何も知らないから年さへ取れば兄の家がもらへると信じて居る。

兄とおれは斯樣に分れたが、困つたのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくつ付いて九州下り迄出掛ける氣は毛頭なし、と云つて此時のおれは四疊半の安下宿に籠つて夫すらもいざとなれば直ちに引き拂はねばならぬ始末だ。どうする事も出來ん。清に聞いて見た。どこかへ奉公でもする氣かねと云つたら、あなたが御うちを持つて、奥さまを御貰ひになる迄は、仕方がないから甥の厄介になりませうと慚く決心した返事をした。此甥は裁判所の書記で先づ今日には差支なく暮して居たから、今

迄も清に來るなら來いと二三度勸めたのだが、清は假令下女奉公はしても年來住み馴れた方がいゝと云つて應じなかつた。然し今の場合知らぬ屋敷へ奉公易をして入らぬ氣兼を仕直すより甥の厄介なる方がましだと思つたのだらう。夫にしても早くうちを持ての、妻を貰への、來て世話をするのと云ふ。親身の甥よりも他人のおれの方が好きなのだらう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ來て金を六百圓出して是を資本にして商買をするなり、學資にして勉强をするなり、どうでも隨意に使ふがいゝ、其代りあとは構はないと云つた。兄にしては感心なやり方だ。何の六百圓位貰はんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊な處置が氣に入つたから、禮を云つて貰つて置いた。兄は夫から五十圓出して之を序に清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場で分れたきり兄には其後一遍も逢はない。

おれは六百圓の使用法に就て寐ながら考へた。商買をしたつて面倒くさくつて旨く出來るものぢやなし、ことに六百圓の金で商賣らしい商賣がやれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com